

## 語用論と臨界期 (4) : 日本語学習者の場合

川手-ミヤジェイエフスカ 恩  
テンプル大学ジャパンキャンパス

### 1. はじめに

本稿では『語用論と臨界期』というテーマでの 2008 年度のベオグラード(川手-ミヤジェイエフスカ 2009)や、2009 年度のウーンでの学会発表(川手-ミヤジェイエフスカ 2010)に引き続き、年齢が語用論的能力習得に及ぼす影響を日本語学習者を中心に考えてみる。これは、2007 年度にハンガリーで発表した(川手-ミヤジェイエフスカ 2008)最初の予備調査の結果をふまえて行った関西と関東の語用論的方略の相違をもとにした研究を更に進展させたもの一部である。具体的には、『友人に母親を語る時』という状況において、日本語学習者の年齢が如何に語用論的習得能力に影響を及ぼしているのかを考察する。

語用論とは、実社会における私たちの言葉の使い方を研究する学問で(Crystal, 1997; Kawate-Mierzejewska, 2009a; 川手-ミヤジェイエフスカ 2008; 2009; 2010)話し手と聞き手の親密度や上下関係、更に言葉を使うそれぞれ場面での状況を考えながら、その場その場にあった適切な方略を追求する学問である。

以下、本稿の研究調査の要となる『脳機能と臨界期』『第二言語習得と年齢』『語用論的能力の発達と年齢』『ダイアレクト習得と年齢』『東日本と西日本の発話方略の相違』『東日本と西日本の語用論的方略の違い』『母語において年齢が語用論的能力に及ぼす影響』を簡単に見ておく。なお、本研究で重要となる発話行為である『褒め言葉と謙遜』に関しては川手-ミヤジェイエフスカ(2009)の 70-71 ページ、そして『脳機能と年齢』と『第一言語習得と年齢』に関しては、川手-ミヤジェイエフスカ(2010)の 40-41 ページを参照されたい。

### 2. 先行研究

#### 2-1 脳機能と臨界期

脳と年齢を考えた場合、普遍的な現象として人間の脳機能は年齢と共に低下してくるようだ (Brehmer, Li, Muller, von Oertzen, & Lindenberger, 2007; Chua, Schacter & Sperling, 2009; Dodson, Bawa, & Krueger, 2007; Dodson, Bawa, & Slotnick, 2007; Grady, Springer, Hongwanishkul, McIntosh, & Winocur, 2006; Shing, Werkle-Bergner, Li, & Lindenberger, 2008)。したがって、脳と言語習得の関係を考えても、年齢と共に言語習得能力も低下してくると考えられる(Hyltenstam & Abrahamsson, 2003; Uylings, 2006)。脳の機能を考えると、人間には、人生の初期に外部からの刺激に対する感受性が最も高まる『臨界期』という短い期間があり(Birdsong, 2005; Montrul,

2008)、その時期には様々なことが自然に習得できる。Johnson & Newport (1989) は、『臨界期』は乳児期早期から思春期までという。そして、『臨界期』は言語習得にも影響を及ぼすようだ。

言語習得と脳の機能を考えた『臨界期仮説』(*The critical period hypothesis*)によれば、生後 10 年間は脳の可塑性(*plasticity*)により、努力しなくても言語習得が可能である (Penfield & Roberts, 1959 ; Lenneberg, 1967) という。しかし、思春期の始まりと共に左脳における言語習得領域の側性化(*lateralization*)が強まる為、脳の可塑性(*plasticity*)がなくなり、努力なくしての言語習得は困難になる (Penfield & Roberts, 1959)。そして、思春期が始まる頃からの認知過程の発達 (Newport, 1990) も言語学習に影響を与えているようだ。例えば、「好き」か「嫌い」かということが学習意欲の向上や低下につながり、仮に「教師が嫌い」であれば学習意欲が下がり、その結果言語習得が思うようにいかなくなることもあるらしい。

## 2-2 第二言語習得と年齢

先行研究によれば、子供と大人学習者の第二言語習得過程は、自然に無意識のうちに言語習得をするか、言語学習を通して言語習得をするかという点で異なるという (DeKeyser, 2003; Paradis, 2004; Ullman, 2001)。そして、その理由として考えられるのが、前項で述べた『臨界期仮説』によって説明できるようだ。つまり、子供学習者が持つ可塑性は、言語の自然習得に役立ち、それがなくなってしまった大人の学習者は、意識的に文法や文の構造などの学習を繰り返すことにより第二言語運用能力を習得するようだ (母語話者に近い言語能力習得に成功した場合) (DeKeyser, 2003)。したがって、第二言語習得においても年齢は、大きな要因となるようだ。

先行研究によれば、思春期前の第二言語学習者と大人の学習者とは、若い学習者の方が効率よく言語習得ができる (Chomsky, 1959; Pinker, 1994) というだけでなく、最終的に到達する第二言語運用能力にも差がつき、後者が前者より優れた結果を招くようなことはまずないという (Abrahamsson & Hyltenstam 2008)。言い換えれば、第二言語習得にも臨界期がある (Hyltenstam & Abrahamsson, 2001, 2003) ということになる。

Abrahamsson & Hyltenstam (2008) は、大人の学習者が母語話者に近い言語能力を習得しようとするれば、高度な言語適正能力を必要とするが、子供の場合は必ずしもそうではないという。また、大人の第二言語学習者でも母語話者に近い言語能力が習得できるということが、『臨界期仮説』を支持しないということにはならないとも言う。更に、大人の学習者は母語話者に近い言語能力習得はできるが、あくまでも「母語話者に近い」ということであって「完全に母語話者のようだ」ということではない“... near native rather than entirely native like...” (Abrahamsson & Hyltenstam, 2008, p. 482) と述べている。また、高度な第二言語運用能力を身につけていても、学習者の使う文法は、母語話者のそれと異なるのでやはり、「母語話者に近い言語能力習得」ということになるようだ (Sorace and Robertson, 2001)。先

行研究の中には、学習項目によって年齢と各項目習得の関係が変わってくるという考え方もある (Beck, 1998; Franceschina, 2001; Hawkins and Chan, 1997; Hawkins and Hattori, 2006; Tsimpli and Dimitrakopoulou, 2007)。つまり、大人の学習者でも容易に習得できる項目もあれば、なかなか習得できないものもあるということだ。いずれにしても、子供の第二言語学習者は言語適正能力や学習項目の如何にかかわらず母語話者のような言語能力が習得できるということがわかっている (e.g., DeKeyser, 2003; Harley & Hart, 1997)。したがって、第二言語習得でも臨界期の有無を考えざる負えなくなってくる。

### 2-3 語用論的能力の発達と年齢

先行研究によれば、母語における語用論的能力は、初期における第一言語発達の過程(幼児期から小学生の時)に発達するようだ (Ervin-Tripp & Gordon, 1986; Gordon, Budwig, Strage & Carrell, 1980; Liebling, 1988; Walters, 1981; 詳細は川手・ミヤジェイエフスカ 2009 の 41 ページ参照のこと)。つまり、母語においては、臨界期仮説は語用論習得においても支持されるようだ。

次に、第二言語における語用論的能力の発達と年齢の関係だが、大人の学習者にとって、第二言語における語用論的能力の習得は容易ではないがいずれは、習得できるのではないかと Borgonovo, Bruhn de Garavito, & Pre'vost, 2006; Montrul & Rodríguez-Louro, 2006) という見解もある。そしてなぜ、簡単に習得できないかという理由として、学習者の母語と第二言語間での言語間干渉が考えられる (Rothman, 2009) という。また、語用論的能力は統語論とも関わる統合的な能力なので、学習者はそれぞれの知識 (ここでは統語論と語用論) の統合ができるようになって初めて語用論的能力が習得できることになり、語用論的能力自体が複雑なので、習得が遅れる (Sorace, 2004; Sorace & Filiaci, 2006) という説明もある。

以上より、第二言語における臨界期について考えてみると、前出(2-2 参照)のように、学習事項によって異なってくるのかもしれない。つまり、音韻論や形態論などの分野には臨界期が存在するが、語用論レベルになると一概にそうとは言えないのかもしれない。

### 2-4 ダイアレクトの習得と年齢

先行研究によれば、ダイアレクトの習得においても特に発音(音韻論)に関しては難しいようだ。思春期前 (ここでは 8 歳になる前) であれば、学習者は同じ言語の異なるダイアレクトの新しい発音を習得できる (Chambers, 2003; Trudgill, 1986) が、思春期を過ぎると同じ言語でもダイアレクトの新しい発音を習得することは困難であるという (Krashen & Seliger, 1975; Scovel, 1998; Starks & Bayard, 2002)。最近の研究 (Tagliamonte & Molfenter, 2007) では、カナダのオタワから 5 歳前にイギリスのヨークに移り住んだ子どもたちは、イギリスのヨーク英語母語話者の発音に近いものは習得できたが、移住から 6 年たっても発音においては完全なヨー

ク英語母語話者にはならなかったという。この結果から、臨界期と言われる時期においてさえ異なるダイアレクトの発音の習得は難しいことがわかる。これは、日本語習得においても例外ではなく、思春期を過ぎて異なるダイアレクトを習うと、最初に習得したダイアレクトのピッチ・アクセントを使う傾向にある (Kawate-Mierzejewska, 2009b) ことがわかっている。

## 2-5 東日本と西日本の発話方略の相違

先行研究より、東日本と西日本では東京弁とか関西弁という表現の違いに加えて、言語の使い方（話し方とか、会話の運び方）にも違いがあると感じている人が多いようだ。

川手・ミヤジェイエフスカ(2008)では、19歳から30歳までの関東周辺の日本語を母語とする大学生たちの協力を得て、関東の人たち（東京・神奈川出身者）と関西の人たち（大阪・神戸出身者）の行動や発話方略の違いを調査した。本研究に参加してくれた66名のうち、22名は調査を実施した日よりさかのぼり6カ月以内に関東に引っ越してきた学生たちであった。本研究は、パイロット・プロジェクトとして行われたもので、簡単なアンケートを使用した。アンケートの内容は、関東と関西の人たちの行動や発話方略の違いはどんなところにあると思うか（もしくは、感じるか）を問うものであった。アンケートは研究調査参加同意書と共に、授業の後の休み時間に配布され15分程で思いつくことを書いてもらった。

収集データ分析の結果、「話し方の態度、方略、表現の単刀直入さ、トピックや非言語的要素に至るまで違っていると感じている人が多いようだ(川手・ミヤジェイエフスカ 2008 97 ページ)」と分かった。例えば、関西人は関東人と比べて「自己主張が強い」「気さくに誰とでも話す」「よくしゃべる」「話術がうまい（話に流れや落ちがある）」「声やジェスチャーが大きい」「笑いのつぼが深い」とか「ギャグやユーモアのセンスがある」と感じている人が多かった。また、トピックに関しては、関西では「如何に安く値切っていいものを買うか」ということが高く評価されるようで、「値切る」というのが自慢話となるようだ。

## 2-6 東日本と西日本の語用論的方略の相違

川手・ミヤジェイエフスカ(2009)では、前年度の研究結果（上記2-4参照）を踏まえて作成された談話完成テストを使い『身内を語る時』と言う状況においての東日本と西日本における語用論的方略を比較し、関東と関西の方略の違いや年齢が語用論的能力習得においてどのような影響を与えるのかを間接的データを使って調査した。結果、関東と関西の発話行為における方略の相違点や、語用論能力は、第一言語の発達と共に習得されるのではないかということがわかった。以下、本先行研究を簡単にまとめておく。

本先行研究では、談話完成テストを使って『友人を食事に招待する際に身内のことを語る』際の発話を書いてもらいまず、東日本と西日本の『身内を語る』発

話行為の共通点や相違点を考察した。そして、その結果を踏まえて、西日本で生まれたが、小学校に入る前に東京周辺に引っ越したグループ(7名)と、子供時代を西日本で過ごし臨界期が終了したと考えられる12~13歳を過ぎてから関東に引っ越したグループ(7名)の共通点や相違点を吟味し、年齢と語用論的能力の習得の関係についての分析を試みた(詳しくは、川手・ミヤジェイエフスカ 2009 参照)。

ここでは、小学校に入学する前に関東に引っ越したグループが関東で使われる方略を使い、小学校を卒業してから引っ越してきたグループは関東に住んでいるにもかかわらず、なお西日本で使われる方略を使う傾向にあるということがわかれば、それを以って、語用論的能力は中学に上がる前の母語習得・発達の過程で発達するというものになると考えた。更に、これが証明できれば、語用論的能力の習得にも臨界期があるのではないかといえるとも考えた。

分析の結果、関東でも西日本でも、希望や前向きな意見(『楽しい時間になるよ』)を述べたり、社交辞令(『お会いできるのを楽しみにしています』)を使ったり、惚気たりする(『料理の腕にほれ込んで結婚したようなものだから』)傾向があることがわかった。関東では身内の『外見』や『人柄』を褒めるのに、西日本では『能力』を褒める傾向にあるようだ。次に関東では、社交辞令的な発話が多いが、西日本では事実に基づく代弁、つまり身内が言ったことをそのまま伝えるという形式の方が多そうだ。これらの他には、身内の人物紹介や感謝の表現は、西日本に多く見られる方略らしいことがわかった。また、小学校へあがる前に、関東に移住した西日本生まれの話者たちは、外見を褒めたり社交辞令を使ったりすることにおいては関東の発話方略を身につけていることもわかった。更に、小学校を卒業してから、つまり思春期を迎えた後に関東に移住した人たちは、『能力を褒める』とか『家族の代弁をする』とか『人物紹介をする』というような西日本に多く見られる発話を多く使っていた。つまり、思春期を迎えた後に関東に移住した人たちは、関東に住み始めて何年も経っても関西で習得したであろう発話方略を使う傾向があるらしいことがわかった。従って、語用論的能力にも臨界期があるのではないかとこの結果が得られた。

## 2-7 母語において年齢が語用論的能力に及ぼす影響

語用論的能力発達とその時期に関して考えてみると、筆者自身の先行研究の結果からは、語用論的能力は第一言語習得と同時に発達するのではないかと考えよう。以下、研究結果をまとめておく。

川手・ミヤジェイエフスカ(2010)では、関東で生まれ育ったグループと、小学校に入学する前に関東に引っ越してきた人たち、そして思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた人たちの『母親を語る』際の発話行為の類似点と相違点を分析した。本研究には、関東で生まれ育った44人(以下、関東と呼ぶ)、関西で生まれ、小学校に上がる前に関東に引っ越してきた8人(以下、小学校入学前と呼ぶ)、それから、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきた16人(以下、思春期過ぎと呼ぶ)の発話行為の類似点と相違点を分析した。

ぶ) が参加した。談話完成テストを使って『友人を食事に招待する時に母親を語る』際の発話を書いてもらい分析した。

まず、類似点として、どのグループも多かれ少なかれ『聞き手に対しての発言』では希望や前向きな意見を述べることがわかった。次に相違点だが、『その場にはいない母親を褒める』というカテゴリーにおいて、関東や小学校入学前のグループより思春過ぎのグループが母親を褒める傾向にあり、特に、『能力』を褒める傾向にあることが分かった。これは、関東や小学校入学前のグループにはあまり見られない。予備的研究調査(川手・ミヤジェイエフスカ 2009)から、西日本では、『能力』を褒めるということがわかっているため、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループは、やはり関西で見られる方略をそのまま使っているのかもしれないとも考えられる。また、『その場にはいない母親に代わって話す』においても、関東と思春過ぎグループは、各々の発話数全体の半数以上がこのカテゴリーに分類されるが、思春過ぎグループは30%程の発話にとどまっている。また、サブ・カテゴリーをみても関東と小学校入学前グループは発話の殆どが『社交辞令』だったのに対し、思春過ぎのグループの場合は、約半数の発話(6/11)にとどまっていた。更に、予備的研究調査(川手・ミヤジェイエフスカ 2009)からも、関東では、身内に代わって社交辞令的な発話をするという結果が出ている。これらより、思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループは、関東で使われる社交辞令的な発話の習得はできていないのではないかとということが伺える。

以上、関東と小学校入学前グループの発話には共通点が多いが、思春過ぎのグループのそれとは異なるようだ。更に、思春過ぎグループの発話は西日本の発話との類似点が多い事もわかった。したがって、身内を語るような状況における語用論的能力は、母語習得の過程で発達し、小さい時に養われたそのような能力は大人になってもそのまま身に付いているのかもしれない。そういう意味で、思春期を過ぎてから母語における異なるダイアレクトの語用論的能力を発達させ習得するのは難しいのかも知れない。言い換えれば、語用論的能力は幼児期の母語習得と同時に発達するということになる。

### 3. 本研究の目的と枠組み

本研究調査は、現在までの研究(川手・ミヤジェイエフスカ 2008; 2009; 2010)を踏まえ、日本語学習者の語用論的能力の習得が言語習得のどの段階で行われるか、また臨界期が語用論的能力の習得どのようにかかわってくるのかの解明を目的とする。そして、言語習得に努力が必要になる思春期を過ぎてからでも第二言語における語用論的能力の習得はできるのか否かということも考えてみる。

具体的には、アメリカ英語を母語とする日本語学習者の語用論的能力習得時期を考えてみる。ここでは、研究調査が行われた時点で日本に来て2週間以内のアメリカ英語話者、その時点で独学でない日本語学習歴が1年以上で滞在歴が3カ月以内という日本語学習者、そして同じく独学でない日本語学習歴が2年以上で

日本滞在歴が1年以上という日本語話者に焦点をあてる。ここでは、まず日本語母語話者（川手・ミヤジェイエフスカ 2010 の結果を使用）と日本に来たばかりのアメリカ英語母語話者の語用論的方略の類似点や相違点を明らかにする。そして、それを基に、日本滞在歴が長く日本社会で暮らしている日本語を話すアメリカ英語母語話者の語用論的方略は、日本に来たばかりのアメリカ英語話者のそれと同じなのか、それとも日本語母語話者の方略と類似点が多いのかを考察することにより、第二言語における語用論的能力習得の時期はいつなのかの解明を試みる。即ち、彼らの語用論的方略が英語母語話者のそれと同様であれば、語用論的能力は第一言語習得過程で発達すると考えられる。そして、日本語母語話者間での東西のダイアレクトとともに習得された語用論的能力に見られるように（川手・ミヤジェイエフスカ 2009; 2010）、第一言語習得過程で習得された語用論的能力を学習言語に合わせて調節するのは難しいかもしれないといえるのではないかということになる。

#### 4. 研究調査事項

1. 日本語母語話者（関東で生まれ育ったグループ）とアメリカ英語話者の『母親を語る』際の発話行為の類似点や相違点は何か。
2. 日本語母語話者（関東で生まれ育ったグループ）、アメリカ英語話者、日本語学習歴が1年以上で日本滞在歴が3カ月以内という日本語学習者と日本語学習歴が2年以上で日本滞在歴が1年以上という日本語話者の『母親を語る』際の発話行為の類似点や相違点は何か。

#### 5. 研究調査方法

##### 5.1 参加者

19歳から30歳までの日本語を母語とする関東(東京、神奈川、大宮までの東京寄り埼玉県、市川までの東京寄り千葉県)で生まれ育った関東に住む44人(コントロール・グループ) (川手・ミヤジェイエフスカ 2010) と19歳から32歳までのアメリカ英語を母語とし、同じく関東周辺に住む71人の大学生・大学院生たちが本研究に協力してくれた。

アメリカ英語母語話者は、3つのグループから成り、研究調査が行われた時点で日本に来て2週間以内のアメリカ英語話者35人(コントロール・グループ)、その時点で独学でない日本語学習歴が1年以上で滞在歴が3カ月以内という日本語学習者18人、そして同じく独学でない日本語学習歴が2年以上で日本滞在歴が1年以上という日本語話者18人が参加してくれた。日本に来て2週間以内のアメリカ英語話者は日本語を習ったことが全くないアメリカ英語母語話者で、日本語に関しては「ありがとうございます」とか「おはようございます」というような挨拶の表現をいくつか知っているという程度であった。次に、独学でない日本語学習歴が1年以上で滞在歴が3カ月以内というアメリカ英語を母語とする日本語学

習者のグループの日本語のレベルは中級、そして日本語学習歴が2年以上で日本滞在歴が1年以上という日本語話者たちの日本語レベルは上級であった。

## 5.2 研究調査マテリアルとデータ収集過程

データ収集には、3つの異なる発話行為に関する状況を想定した日本語版と英語版からなる談話完成テストが使われたが、本稿では、予備的研究調査（川手・ミヤジェイエフスカ 2008; 2009）をもとに調整された『友人を食事に招待する時に母親を語る』という発話行為をとりあげる（参考資料1）。この『友人を食事に招待するとき』の状況は Sakamoto & Sakamoto (2004)の “You and I are equal (「私たちは平等です」)”という逸話を基に作成されたものである。予備的研究調査で使われたシナリオは、『友人を食事に招待する時に、配偶者のことをどう話すか』という内容のものであったが、研究参加者の大半が独身であるということを考慮して、予備的研究調査で使われた談話完成テストに修正を加えた。そして本研究は『友人を食事に招待する時に、自分の母親のことをどう話すか』という内容で調査をした。

談話完成テストは、参加者の個人情報収集するためのアンケート（参考資料2）や、進んで研究調査に参加しデータを提供するという同意書（参考資料3）と共に、授業の後の休み時間などに配布され20分程でやってもらった。個人情報を収集するためのアンケートや同意書は日本語母語話者には日本語（川手・ミヤジェイエフスカ 2010）で、アメリカ英語母語話者には英語で書かれたものを使用した。

アンケートの手順としては、まず、参加者に関する情報収集のためのアンケートを配り、それを書いてもらってから談話完成テストをやってもらった。そして、最後に同意書を渡し必要事項を記入してもらい回収した。

## 5.3 収集データ分析方法

本研究では、日本語母語話者や日本語を話すアメリカ英語母語話者（日本語学習者や日本語を母語としない日本語話者）による日本語でのデータとアメリカ英語母語話者による英語でのデータを収集した。

収集データを分析する際に、まず全ての発話をそれぞれのグループ（日本語母語話者による日本語、英語母語話者による日本語、英語母語話者による英語）に分類しその結果を分析した。以下、分類の種類とコーディングについて述べる。

### 5.3.1 日本語のデータ

日本語のデータの分析方法は、日本語母語話者のデータを分析した川手・ミヤジェイエフスカ (2010) と同様の方法を使った（詳細は川手・ミヤジェイエフスカ 2010 43 から 46 ページ）。更に日本語母語話者による日本語のデータは川手・ミヤジェイエフスカ (2010) の結果を採用した。以下、本研究に関係のある日本語のデータの分析方法を簡単にまとめておく。



まず、日本語母語話者 44 人から収集されたデータと英語母語話者 36 人による日本語のデータは、表現（以下、発話と呼ぶ）一つを『いち』と数えた。従って、接続詞で繋がっているような表現は二つの発話と考えられた。例えば、「とても陽気な人だから、君もとても話しやすいと思うよ」というような表現は「とても陽気な人」と「君もとても話しやすいと思う」というように二つの発話からなると考えられた。また、発話者がそれぞれのターンで、一言から二言（「きっと喜びます。ありがとう」）、三言（「料理がとても上手なんだよ。きっと気に入ると思う。あと母は政治について話すのが好きなんだ」）と話すこともあり全体で 129 の発話（日本語母語話者による 71 の発話と英語母語話者による日本語での 58 の発話）となった。

全ての発話は、『その場にはいない母親を褒める』『その場にはいない母親に代わって話す（母親のために）』『聞き手に対しての発言』『家族としての発言』『話し手の気持ちを述べる』『その場にはいない母親のことを謙遜する』という 6 つの大きなカテゴリーに分けられた(表 1 参照 [川手-ミヤジェイエフスカ 2010 44 ページ])。以下、それぞれのカテゴリーを簡単に見ておく。

まず『その場にはいない母親を褒める』というのは、褒める内容を考え『外見』『人柄』『能力』という 3 つのサブ・カテゴリーに分け、「かわいい」というのは『外見』、「やさしい」とか「陽気な人」は『人柄』、そして「料理が上手」というのは『能力』と考えた。更に、料理そのものを褒める発話（「おいしい」）も母親の料理の腕前を褒めているものと解釈して『能力』というサブ・カテゴリーに入れた。次に『その場にはいない母親に代わって話す（母親のために）』というカテゴリーだが、これは、母親の発言を想定して、話し手が代弁するものである。英語を使えば、“she（母親）...”と母親が主語になる発話である。ここでは、発話の内容を考え、『社交辞令』『代弁（聞き手に対する気持ち）』『代弁（お料理に関すること）』『人物紹介』という 4 つのサブ・カテゴリーに分けた。そして、「あなたに会うのを楽しみにしている」のような定形発話は『社交辞令』と考えた。『代弁』は聞き手に対する気持ちとお料理に関することというカテゴリーに分け、「君のことをとても気に入っている」という母親の気持ちを代弁した発話は『代弁（聞き手に対する気持ち）』に分類され、「美味しいご飯を作ると張り切っていた」という料理に関する発言は『代弁（お料理に関すること）』に入れた。更に、「母親は、昔、歌手だった」というような母親の紹介は『人物紹介』とした。次のカテゴリーは『聞き手に対しての発言』だが、これにもサブ・カテゴリーがあり、『希望・前向きな意見』『依頼』『提案』『感謝』『代弁（聞き手のために）』『好意（聞き手の好みを聞く）』に分けた。まず、「...食事を楽しんでほしい」という発話は『希望・前向きな意見』で、「時間があったら何か買ってきてよ」というのは字のごとく『依頼』で、「...今回の選挙についてなんていうのか準備しておいた方がいいよ」というような発言は『提案』と考え、「ありがとう」は『感謝』とカテゴリーに入れた。残りの『代弁（聞き手のために）』と『好意（聞き手の好みを聞く）』に関してだ

表1 分類の種類とコーディング(日本語)

	発話
その場にはいない母親をほめる	
外見	とてもかわいいよ。
人柄	とても優しいよ：とても陽気な人だから。。。。
能力*	料理がうまいので。。。：料理が上手だから。。。 おいしいですよ。
その場にはいない母親に代わって話す(母親のために)	
社交辞令	君に会うのを楽しみにしてるよ：あなたに会うのを楽しみにしています。
代弁(聞き手に対する気持ち)	君のことをとても気に入ってます。
代弁(料理に関すること)	美味しいご飯を作ると張り切っていました。
人物紹介	彼女は昔、歌手だったんだ。
聞き手に対しての発言	
希望・前向きな意見	素晴らしい夕食をとることができるでしょう：。。。 食事を楽しんでほしい。
依頼	時間があったら何か買ってきてよ。
提案	。。。 今回の選挙についてなんていうのか準備しておいた方がいいよ。
感謝	ありがとう。
代弁(聞き手のために)	該当なし
好意(聞き手の好みを聞く)	なにか苦手なものはありますか。
家族としての発言	
社交辞令	金曜日にお待ちしてますね。
話し手の気持ちを述べる	
直接的	。。。 君に会わせるのが楽しみです。
間接的	僕はいつも母に君のいいところを語り聞かせているからね。
その場にいない母親のことを謙遜する	
前向きな謙遜	御馳走をふるまってくれるらしいよ。
否定的な謙遜	。。。 はっきりいって料理には期待しない方がいいよ。

\* 『能力』には、「母親は料理が上手だ」という料理の上手さを褒めるものに加えて、「母親の作ったお料理はおいしい」というお料理そのものを褒めるものも入れてある。

(出典：川手-ミヤジェイエフスカ 2010 44 ページ)

が、前者は日本語のデータには該当がなかったが、英語のデータとの比較のために入れてある(5.3.2の英語のデータ参照)。そして後者には「なにか苦手なものはあるか」のような好意的な発話がある。次のカテゴリーは、『家族としての発言』だが、これは、英語を使えば“we”にあたるもので、「金曜日にお待ちしてますね」というような『社交辞令』がこのカテゴリーに入った。次に、『話し手の気持ちを述べる』というカテゴリーだが、ここでは、話し手は聞き手に自分の気持ちを直接述べるのか間接的に述べるのかに焦点を当て、『直接的』(e.g., [僕は母を] 君に合わせるのが楽しみです)と『間接的』(e.g., 僕は君のことが大好きなので)いつも母に君のいいところを語り聞かせているからね(それぞれの例の[ ]の中は、言葉にされなかった部分である。また、下線部は直接的表現と間接的表現を示している)というサブ・カテゴリーを作った。最後のカテゴリーは、『その場にいらない母親のことを謙遜する』というもので、データをもとに『前向きな謙遜』(e.g., 御馳走をふるまってくれるらしい)と『否定的な謙遜』(e.g., ...料理には期待しない方がいい)に分けた。

### 5.3.2 英語のデータ

次に、英語でのデータについてみていく。英語母語話者35人から、収集されたデータは、日本語のデータと同じように、表現(以下、発話と呼ぶ)一つを『いち』と数え、接続詞で繋がっているような表現は二つの発話と考えられた。例えば、“she is making her specialty and can't wait to meet you.”という表現は“she is making her specialty”(「得意料理を作ってくれるようだ」と“she can't wait to meet you”(「君に会うのが待ちどろしいってさ」というように二つの発話からなると考えられた。また、各人がそれぞれのターンで、一言から二言(e.g., “she is a very good cook. I'm sure she will be making something special”[「料理がとても上手なんだ。絶対にか特別なものを作ってくれるよ」])、更には三言(e.g., “she is making chicken pot pie. It is wonderful. She really is a good cook”[「母はチキンポットパイを作ってくれるよ。それが、とてもおいしいんだ。それに、母は本当に料理が上手なんだ。」])と話すこともあり全体で63の発話となった。

発話の分類は、日本語による発話と比較するため、日本語でのデータを分析する時に使われた『その場にいらない母親を褒める』『その場にいらない母親に代わって話す(母親のために)』『聞き手に対しての発言』『家族としての発言』『話し手の気持ちを述べる』『その場にいらない母親のことを謙遜する』という6つの大きなカテゴリーを使った(表2参照)。

まず、最初の『その場にいらない母親を褒める』というカテゴリーは、母親の何を褒めるかという内容を考慮し、更に『人柄』と『能力』という2つのサブ・カテゴリーに分けた。日本語でのデータとの比較のため日本語データに見られた『外見』というカテゴリーはそのままにしてあるがそれに該当する発話はなかった。表2にあるように、“she's nice(「いい人です」)”とか“she is a very good woman(「と

表 2 分類の種類とコーディング (英語)

	発話
その場にはいない母親をほめる	
外見	該当なし
人柄	She's very nice; She is a very nice woman.
能力*	She's a great cook; She is a very good cook. ...it [chicken pot pie] is wonderful.
その場にはいない母親に代わって話す(母親のために)	
社交辞令	She's looking forward to meeting you, too.
代弁 (聞き手に対する気持ち)	... would love to cook dinner for you.
代弁 (料理に関すること)	She's going to cook meat and potatoes.
人物紹介	She's a housewife.
聞き手に対しての発言	
希望・前向きな意見	It'll be fun; I'm sure you'll like her.
依頼	該当なし
提案	該当なし
感謝	該当なし
代弁 (聞き手のために)	I'll let her know you are coming.
好意(聞き手の好みを聞く)	What would you want to eat?
家族としての発言	
社交辞令	該当なし
話し手の気持ちを述べる	
直接的	該当なし
間接的	該当なし
その場にはいない母親のことを謙遜する	
前向きな謙遜	She's a little crazy.**
否定的な謙遜	... they are all greatly exaggerated.

\* 『能力』には、「母親は料理が上手だ」という料理の上手さを褒めるものに加えて、「母親の作ったお料理はおいしい」というお料理そのものを褒めるものも入れてある。  
\*\*字面をみただけだと否定的なように見えるが、この発言はほかの人と違っている (being different) という観点からなされたものであるので前向きな発言と考える。

てもいい人です)」というの『人柄』、そして “she's a fantastic cook (「料理がとても上手です)」” というの『能力』と考えた。更に、“...it [chicken pot pie] is

wonderful (「[母親の作る]チキンポットパイはおいしいよ)」” というようなお料理そのものを褒める発話も『能力』というカテゴリーにいれ、母親の料理のうまさを褒めていると考えた。次に『その場にはいない母親に代わって話す (母親のために)』というカテゴリーだが、これは、話し手が、母親が言うだろうことを想定して、代弁するものである。日本語のデータの分類のカテゴリーと同様、『社交辞令』『代弁 (聞き手に対する気持ち)』『代弁 (お料理に関すること)』『人物紹介』という4つのサブ・カテゴリーに分けた。そして、“she’s looking forward to meeting you as well (「母もあなたにお会いするのを楽しみにしています)」” というような定形発話は『社交辞令』とした。更に、“she would love to cook for you (「君ためにお料理を作りたがっている)」” というような母親の気持ちを代弁した発話は『代弁 (聞き手に対する気持ち)』と考え、“she’s going to cook pot roast and mashed potatoes (「母はポットローストとマッシュポテトを作るよ)」” というようなお料理に関する発話は『代弁 (お料理に関すること)』とした。そして、“she’s a housewife (「母は主婦なんだ)」” というような母親の紹介は『人物紹介』とした。次の『聞き手に対しての発言』では、『希望・前向きな意見』『代弁 (聞き手のために)』『好意 (聞き手の好みを聞く)』の3つのサブ・カテゴリーを使った。まず、“I’m sure you will like her” (「彼女のこと、間違いなく気に入るよ)」という前向きな発話は、『希望・前向きな意見』と考え、“I’ll let her know you are coming (「君が来てくれることを母に伝えておくよ)」” のように、聞き手のメッセージを母親に伝えるというものは『代弁 (聞き手のために)』とした。そして、“what would you like to eat? (「何が食べたい?)」” とか “I want to know your favorite food...” (「君の好きな食べ物を教えて。。。)」” というような発話は『好意 (聞き手の好みを聞く)』と考えた。表 2 からわかるように、この『聞き手に対しての発言』というカテゴリーで、日本語のデータに見られた『依頼』『提案』『感謝』という3つのサブ・カテゴリーに該当する発話は英語にはなかった。更に、次の『家族としての発言』、そして『話し手の気持ちを述べる』というカテゴリーは、日本語のデータにはみられたが、英語ではこれらに該当するものはなかった (既に述べたように、これらのカテゴリーは日本語のデータと比較をする為に表に入れてある)。

最後のカテゴリーは、『その場にはいない母親のことを謙遜する』というもので、『前向き、あるいは否定的な謙遜』という2つのサブ・カテゴリーに分けた。他の人とは違う (being different) という意味で使われている “she’s a little crazy... (「他の人とは違うんだよ)」” は『前向きな謙遜』と考え “...they are all greatly exaggerated (「それらは、すごく大げさに語られるからね)」” は、字面から『否定的な謙遜』とした。

### 5.3.3 コーダー間信頼性と分類された発話分析

日本語 (129) と英語 (63) の全ての発話を2人のコーダーで分類した後(コーダー間の信頼性は90%以上で、意見が食い違った発話に関しては話し合いで分類さ

れるカテゴリーを決めた)、それぞれのカテゴリーの発話回数を数えて、観測度数 (observed frequency) を基にまず、日本語母語話者による日本語のグループ (関東で生まれ育ったグループ) とアメリカ英語母語話者による英語のグループとの発話の類似点や相違点を観察した。それから、英語母語話者による英語の発話、日本語母語話者による日本語の発話、滞在歴が 3 カ月以内というアメリカ英語を母語とする日本語学習者の発話、そして日本語学習歴が 2 年以上で日本滞在歴が 1 年以上という日本語話者の発話の類似点や相違点を分析した。そして、それらの結果を踏まえて、年齢が語用論的能力の習得に与える影響を探ってみた。

本研究は、観測度数 (observed frequency) を基にはしているが、予備研究調査や先行研究と同様に、統計処理の結果を想定した上で収集データの分析を試みた。言い換えれば、本研究は、第二言語における語用論的能力の習得と臨界期の有無に関しての理論構築における最初の段階で、それぞれのカテゴリーにおける発話数が理論構築のための統計処理をするには少なすぎ、統計処理をするに至らなかったということになるのかも知れない。また、各人が複数の発話をしている場合もあり、一人の参加者の発話が一つのカテゴリーだけでなく他のカテゴリーにも及んでいるのも統計処理をしなかった理由の一つである。おわりに、本研究は、間接的データより語用論的能力の習得と臨界期の有無に関して傾向を見出そうとするものであるということも付け加えておきたい。

## 6. 結果と考察

本セクションでは、まず、日本語母語話者 (関東で生まれ育ったグループ) とアメリカ英語話者の『母親 (身内) を語る』際の発話行為の類似点や相違点を分析する。そして、中間言語語用論に焦点をあて、日本語を話すアメリカ英語母語話者の日本語での語用論的能力を分析する。具体的には、4 つのグループ (日本語母語話者による日本語、英語母語話者による英語、2 つの異なるグループの英語母語話者による日本語) の発話を比較し類似点や相違点を探り、それらの結果をもとに、語用論的能力の習得に年齢が与える影響や臨界期の有無を、英語を母語とするが日本語を話すという中間言語での発話において考えてみる。

### 6.1 日本語母語話者 (関東で生まれ育ったグループ) とアメリカ英語話者の『母親を語る』際の発話行為

まず、類似点から見ておく。表 3 より、英語でも日本語でも『聞き手に対しての発言』があり、希望や前向きな意見を述べたり (英語 7/13、日本語 8/18)、聞き手の好みを聞いたりする (『好意』英語 5/13、日本語 4/18) ことが分かった。また、『その場にはいない母親の外見を褒める』発話や『話し手の気持ちを述べる』というカテゴリーに該当する発話は英語にも日本語 (関東) にも見られなかった。

次に相違点だが、まず統計的にも異なるとされる観測度数に焦点を当ててみる。表 3 より『その場にはいない母親を褒める』というカテゴリーを見ると、日本

表 3 母親を語る時に使われる方略

	英語(日本に来て 2 週間以内で日本語学習歴殆どなし)	日本語 (関東)	合計
その場にはいない母親をほめる	20	6	26
外見	0	0	0
人柄	6	3	9
能力	14	3	17
その場にはいない母親に代わって話す (母親のために)	26	43	69
社交辞令	13	34	47
代弁 (聞き手に対する気持ち)	2	3	5
代弁 (料理に関すること)	9	4	13
人物紹介	2	2	4
<b>聞き手に対しての発言</b>	<b>13</b>	<b>18</b>	<b>31</b>
希望・前向きな意見	7	8	15
依頼	0	3	3
提案	0	2	2
感謝	0	1	1
代弁 (聞き手のために)	1	0	1
好意 (聞き手の好みを聞く)	5	4	9
<b>家族としての発言</b>	<b>0</b>	<b>2</b>	<b>2</b>
社交辞令	0	2	2
話し手の気持ちを述べる	0	0	0
直接的	0	0	0
間接的	0	0	0
その場にはいない母親のことを謙遜する	4	2	6
前向きな謙遜	3	1	4
否定的な謙遜	1	1	2
合計	<b>63</b>	<b>71</b>	<b>134</b>

語（関東：6/26）より英語（20/26）の方が母親を褒める傾向にあるようだ。そして、英語話者は特に母親の『能力』（14/20）を褒める傾向にあるようだ（表 3）。この傾向は関西で生まれ思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループと同じ（川手-ミヤジェイエフスカ 2010）でとても興味深い。

では、次に『その場にはいない母親に代わって話す』を見ておく。表 3 よりわかるように本カテゴリーは日本語（43/69）による発話が英語による発話（26/69）より多いようだ。サブ・カテゴリーをみると、日本語（34/43）では英語（13/26）より多くの『社交辞令』を使うようだ。そして、英語（9/26）では日本語（4/43）より頻繁に、お料理に関して母親の代弁をするようだ。

また、件数は少ないが英語（4/6）の方が日本語（2/6）より、若干多めの『母親を謙遜する』という方略を使っている。これは、少ない件数なので一般化などできないが、日本文化は謙遜の文化である（Davies & Ikeno, 2002）という概念にそぐわないかもしれない結果でとても興味深い。

以上、英語でも日本語でも、希望や前向きな意見を述べたり相手の好みを尋ねたりするようだ。また、更に、英語では母親を『褒める』という方略が頻繁に使われるのに対し、日本語では母親に代わって『社交辞令』を述べるという傾向にあるということが分かった。

## 6.2 日本語母語話者（関東で生まれ育ったグループ）、アメリカ英語話者、日本語学習歴が1年以上で日本滞在歴が3カ月以内という日本語話者と日本語学習歴が2年以上で日本滞在歴が1年以上という日本語話者の『母親を語る』際の発話行為

まず、既に説明したように、類似点として英語と日本語の両方にみられた『聞き手に対しての発言』を見ておく。表 4 からわかるように、日本語学習歴が1年以上で日本滞在歴が3カ月以内という日本語話者（以下日本滞在 3 カ月以内）と日本語学習歴が2年以上で日本滞在歴が1年以上という日本語話者（以下、日本滞在 1 年以上）にもこのカテゴリーに該当する発話が見られたが、前者が 3/38 で、後者が 4/38 と両者とも件数が少なく、母語を話す際に用いられる頻度（英語 13/38 と日本語 18/38）とは異なることが分かった（ここでは、統計処理はしていないが処理をしても有意義差がありそうだ）。発話数全体に対する割合を考えると同じ事が言えそうだ。これは、日本語を話す英語母語話者の中間言語における現象に違いないが興味深い結果だ。本来であれば母語の英語において使われている方略が日本語を話す時に転移されても不思議ではないし、ここでは、話し手の母語（英語）と第二言語（日本語）における方略が似ているわけなので改めて第二言語の語用論的能力を習得する必要もなさそうなものだ。にもかかわらず、中間言語でのパフォーマンスは、異なるようだ。おそらく、第二言語ではこのカテゴリーでの語用論的能力を習得することは他のカテゴリーより難しいのかも知れない。件数が少ないのでサブ・カテゴリーの分析は割愛する。



表 4 母親を語る時に使われる方略

	英語	日本語(日本滞在3カ月以内)	日本語(日本滞在1年以上)	日本語(関東)	合計
その場にはいない母親をほめる	20	14	5	6	45
外見	0	0	0	0	0
人柄	6	6	2	3	17
能力	14	8	3	3	28
その場にはいない母親に代わって話す	26	12	14	43	95
社交辞令	13	2	13	34	62
代弁(聞き手に対する気持ち)	2	2	1	3	8
代弁(料理に関すること)	9	7	0	4	20
人物紹介	2	1	0	2	5
聞き手に対しての発言	13	3	4	18	38
希望・前向きな意見	7	0	1	8	16
依頼	0	2	1	3	6
提案	0	1	1	2	4
感謝	0	0	0	1	1
代弁(聞き手のために)	1	0	0	0	1
好意(聞き手の好みを聞く)	5	0	1	4	10
家族としての発言	0	0	3	2	5
社交辞令	0	0	3	2	5
話し手の気持ちを述べる	0	0	0	0	0
直接的	0	0	0	0	0
間接的	0	0	0	0	0
その場にはいない母親のことを謙遜する	4	0	3	2	9
前向きな謙遜	3	0	1	1	5
否定的な謙遜	1	0	2	1	4
合計	63	29	29	71	192

次は相違点だが、前項で分析した英語と日本語の相違点を踏まえてみていく。表 4 より『その場にはいない母親を褒める』というカテゴリーにおいては、日本滞在 3 カ月以内のグループ (14/45) の方が 1 年以上のグループ (5/45) より母親を褒める傾向にあるようだ。そして、英語母語話者(20/45)が母親の『能力』を褒める (14/20 : 発話数全体では 22%[14/63]) ように日本滞在 3 カ月以内のグループも『能力』を褒める (8/14 : 発話数全体では 28%[8/29]) 傾向にある。ちなみに、一年以上グループと日本語母語話者は、発話数全体を考えるとそれぞれ 10%[3/29] と 4%[3/71]にとどまる。つまり、日本語学習期間や日本滞在期間が短い方のグループ(発話数全体では 48%[14/29])が母語である英語 (20/45 : 発話数全体では 32% [20/63]) と同様の方略、もしくは語用論レベルでの中間言語を使うのに対し、日本語学習期間や日本滞在期間が長くなっていくにつれて日本語母語話者 (6/45 : 発話数全体では 8%[6/71]) が使う方略を使うようになるようだ。『褒める』という発話行為においては、日本語が上達するにつれて、語用論的能力の習得もできてくるのかも知れない。

次に『その場にはいない母親に代わって話す』をみていく。表 4 よりわかるように、日本滞在 1 年以上のグループ (発話数全体からみると 14/29) も 3 カ月以内のグループ (発話数全体からみると 12/29) もこの方略を使う頻度は似ているが使い方が異なるようだ。サブ・カテゴリーをみると、日本滞在 1 年以上のグループ (13/14 : 発話数全体では 45%[13/29]) は、日本語母語話者 (34/43 : 発話数全体では 48%[34/71]) のように、社交辞令を頻繁に使う傾向にある。一方、日本滞在 3 か月以内のグループ (2/12 : 発話総数全体では 7%[2/29]) は、日本語での社交辞令は殆ど使っていない。ちなみに英語母語話者も社交辞令は使うようだ(21% [13/63])が、日本語母語話者(48%[34/71])程ではないようだ。日本滞在 3 か月以内のグループは、英語母語話者 (9/26) のように、お料理に関しての母親の代弁 (7/12) はするようだ。ここでも、『社交辞令』という発話行為においては、日本語の上達に伴って、日本語母語話者が使うような語用論的能力が身に付いてくるのかも知れない。

これらの他に、件数は少ないが『家族としての発言』は日本滞在 1 年以上のグループ (3/5) と日本語母語話者 (2/5) にだけ見られた。これは、日本社会にある『内と外』という概念 (Davies & Ikeno, 2002) と結びついている結果なのかもしれない。最後に、『母親を謙遜する』というカテゴリーだが、日本滞在 3 か月以内のグループにはこのカテゴリーに該当する発話はなかった。『母親を謙遜する』という発話行為は、英語でも日本語でもみられたものなので、日本語学習者にみられないのは日本語運用能力が語用論レベルにまで達していないということになるのかも知れない。

以上、日本語学習期間や日本滞在期間が短い方の日本語学習者グループは母語である英語と同様の方略、もしくは語用論レベルでの中間言語を使う傾向にあるのに対し、日本語学習期間や日本滞在期間が長くなっていくにつれて日本語母

話話者が使うような方略を使う傾向にあるようだ。従って、第二言語・外国語における語用論的能力の習得過程は母語のそれとは異なり、学習年数が増えるにつれ、また目標言語のコミュニティに長く住めば住むほど目標言語における様々な方略を習得するのもかも知れない。仮にこれが正しいとすれば、第二言語・外国語における語用論的能力習得においては、年齢の影響はあまりないことになる。

## 7. おわりに

それぞれのグループによる類似点と相似点を簡単にまとめておく。まず、類似点であるが、話し手に対して希望や前向きな意見をいうような『話し手に対しての発言』は言語を問わずに見られる発話のようだ。英語と日本語の方略を比べた結果は、類似点よりも相違点の方が多かった。興味深いことに英語での発話は、関西で生まれ思春期を過ぎてから関東に引っ越してきたグループによる発話（川手-ミヤジェイエフスカ 2010）との共通点が多かった。つまり、英語では『褒める』という発話は多かったが『母親に代わって社交辞令をいう』という発話は関東日本語母語話者の発話件数よりずっと少なかった。次に、日本語運用能力の異なる日本語を話すアメリカ英語母語話者の場合は、日本滞在期間が1年以上で日本語運用能力が高い方のグループの発話は日本語母語話者のそれとの類似点が多く、滞在期間が3カ月以下で日本語運用能力が低い方のグループの発話は学習者にだけみられるものであったり、英語母語話者のそれとの類似点が多かった。

以上のことより、第一言語（母語）と第二言語（もしくは外国語）習得における語用論的能力の習得時期や過程は異なるのではないかということがわかった。つまり、母語では語用論的能力は幼児期の母語習得と同時に発達する（川手-ミヤジェイエフスカ 2010）が、第二言語や外国語では語用論的能力は年齢如何にかかわらず言語習得過程における最終段階で発達するものなのかも知れない。また、第二言語における発話は、第一言語のそれとは全く違ったものと捉えられ、第二言語における語用論的能力習得において、臨界期は関係がないものとなっているのかも知れない（Kawate-Mierzejewska, 2006）。

今後の課題として、参加者の数や発話行為の種類なども増やし、異なる言語においても研究を進めていけるといい。また、調査方法の拡大もはかり脳と語用論的能力習得における臨界期の関係の直接的なデータの収集にも取り組み神経言語学的見地からの考察もできたらと考える。

## 参考文献

- 川手ミヤジェイエフスカ 恩 (2008)『語用論と臨界期(1)-研究方法の模索-』「日本語教育連絡会議論文集 (Papers presented at the 20th International Conference on Japanese Language Teaching [ICJLT])」 Vol. 20, 83-100 ページ
- 川手ミヤジェイエフスカ 恩 (2009)『語用論と臨界期(2)-身内を語るとき:異なるダイアレクトにおいて-』「日本語教育連絡会議論文集 (Papers presented at

- the 21th ICJLT)」 Vol. 21, 68-81 ページ
- 川手ミヤジエフスカ 恩 (2010)『語用論と臨界期(3)-年齢が語用論的能力に及ぼす影響-』「日本語教育連絡会議論文集 (Papers presented at the 22nd ICJLT)」 Vol. 22, 40-52 ページ
- Abrahamsson, N., & Hyltenstam, K. (2008). The robustness of aptitude effects in near-native second language acquisition. *Studies in second language acquisition*, 30, 481-509.
- Borgonovo, C., Bruhn de Garavito, J., Pre´vost, P. (2006). Is the semantics/syntax interface vulnerable in L2 acquisition?: Focus on mood distinctions clauses in L2 Spanish. In V. Torrens, & L. Escobar (Eds.), *The acquisition of syntax in romance languages* (pp. 401-418). Amsterdam: John Benjamins.
- Beck, M-L.(1998). L2 acquisition and obligatory head movement: English speaking learners of German and the local impairment hypothesis. *Studies in Second Language Acquisition*, 20, 311–348.
- Birdsong, D. (2005). Interpreting age effects in second language acquisition. In J. Kroll, & A. de Groot (Eds.), *Handbook of bilingualism, psycholinguistic perspectives*, (pp. 109-127). Oxford: Oxford University Press.
- Brehmer, Y, Li, S-C., Muller, V., von Oertzen, T. & Lindenberger, U. (2007). Memory plasticity across the life span: Uncovering children’s latent potential. *Developmental Psychology*, 43(2). 465-478.
- Chambers, J. K. (2003). *Sociolinguistic theory: Linguistic variation and its social significance (2<sup>nd</sup> edition)*. Malden: Blackwell.
- Chomsky. N. (1959). Review of skinner 1957. *Language*, 35, 26-58.
- Chua, E. F., Schacter, D.L., & Sperling, R. A. (2009). Neural basis for recognition confidence in younger and older adults. *Psychology and Aging*, 24(1). 139-153.
- Crystal, D. (Ed.). (1997). *The Cambridge encyclopedia of language* (2nd ed.). New York: Cambridge University Press.
- Davis, R.J., & Ikeno, O. (Eds.) (2002). *The Japanese mind: Understanding contemporary Japanese culture*. Boston: Tuttle Publishing.
- DeKeyser, R.(2003). The robustness of critical period effects in second language acquisition. *Studies in Second Language Acquisition*, 22 (4), 499–533.  
(本アーティクルは2000年に出版されたSSLAにあるが、2003年にオンライン出版されている)
- Dodson, C.S., Bawa, S. & Krueger, L.E (2007). Aging metamemory, and high-confidence errors: A misrecollection account. *Psychology and Aging*, 22(1). 122-133.
- Dodson, C. S., Bawa, S. & Slotnick, S.D. (2007). Aging, source memory, and misrecollections. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition*, 33(1). 169-181.

- Ervin-Tripp, S. and Gordon, D. (1986). The development of request. In R. L. Schiefelbusch (Ed.), *Language competence: Assessment and intervention* (pp. 61-95). London: Taylor & Francis.
- Franceschina, F. (2001). Morphological or syntactic deficits in near-native speakers? An assessment of some current proposals. *Second Language Research*, 17 (3), 213–247.
- Gordon, D., Budwig, N., Strage, A., and Carrell, P. (1980). *Children's requests to unfamiliar adults: Form, social function, age variation*. Fifth annual Boston university conference on language development, Bston. (ERIC document reproduction service No. ED205-053).
- Grady, C., Springer, M.V., Hongwanishkul, D., McIntosh, A.R., & Winocur, G. (2006). Age-related changes in brain activity across the adult life-span. *Journal of Cognitive Neuroscience*, 18(2). 227-241.
- Harley, B., & Hart, D. (1997). Language aptitude and second language proficiency in classroom learners of different starting ages. *Studies in Second Language Acquisition*, 19, 379–400.
- Hawkins, R., Chan, C. Y-H. (1997). The partial accessibility of Universal Grammar in second language acquisition: The failed functional features hypothesis. *Second Language Research*, 13, 187–226.
- Hawkins, R., & Hattori, H. (2006). Interpretation of English multiple wh-question by Japanese speakers: a missing uninterpretable feature account. *Second Language Research*, 22 (3), 269–301
- Hyltenstam, K., & Abrahamsson, N. (2001). Age and L2 learning: The hazards of matching practical “implications” with theoretical “facts.” *TESOL Quarterly*, 35, 151–170.
- Hyltenstam, K., & Abrahamsson, N. (2003). Maturation constraints in SLA. In C. Doughty, & M. Long (Eds.), *The handbook of second language acquisition*, (pp. 539-588). Oxford: Blackwell.
- Johnson, J. S. & Newport, E. L. (1989). Critical period effects in second language learning: The influence of maturational state on the acquisition of English as a second language. *Cognitive Psychology*, 21(1). 60-99.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2006, September). *Sensitivity to emotional expressions in both L1 and L2*. Paper presented at the 39<sup>th</sup> annual meeting of the British Association for Applied Linguistics, a joint meeting with the Irish Association for Applied Linguistics, Cork, Ireland.
- Kawate-Mierzejewska, M. (2009a) Refusals in Japanese Telephone Conversations (Chapter 8), in N. Taguchi (Ed.), *Pragmatic Competence: Mouton Series in Pragmatics* (pp. 199-226). New York: Mouton.

- Kawate-Mierzejewska, M. (2009b). Age effects on dialect acquisition of Japanese pitch accent. *Journal of the Department of Asian and African Studies*, 13 (1), 179-198. Ljubljana (Slovenia): University of Ljubljana: Faculty of Arts.
- Krashen, S. & Seliger, H. (1975). Maturation constraints on second dialect acquisition. *Language Sciences*, 38, 28-29.
- Lenneberg, E. (1967). *Biological foundations of language*. New York: Wiley & Sons.
- Liebling, C. (1988). Means to an end: Children's knowledge of directives during the elementary school years. *Discourse Process*, 11, 77-99.
- Montrul, S., & Rodríguez-Louro, C. (2006). Beyond the syntax of the Null Subject Parameter: a look at the discourse-pragmatic distribution of null and overt subjects by L2 learners of Spanish. In V. Torrens, & L. Escobar (Eds.), *The acquisition of syntax in romance languages* (pp. 401-418). Amsterdam: John Benjamins.
- Montrul, S.A. (2008). *Incomplete acquisition in bilingualism: Re-examining the age factor*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Newport, E. L. (1990). Maturation constraints on language learning. *Cognitive Science*, 14, 11-28.
- Paradis, M. (2004). *A Neurolinguistic Theory of Bilingualism*. Amsterdam: John Benjamins.
- Penfield, W., & Roberts, L. (1959). *Speech and brain mechanisms*. New York: Atheneum Press.
- Pinker, S. (1994). *The language instinct*. London: Penguin Books.
- Rothman, J. (2009). Pragmatic deficits with syntactic consequences?: L2 pronominal subjects and the syntax-pragmatics interface. *Journal of Pragmatics*, 41, 951-973.
- Sakamoto, N. & Sakamoto, S. (2004). *Polite Fictions in Collision: Why Japanese and Americans seem rude to each other*. Tokyo: Kinseido.
- Scovel, T. (1988). *A Time to speak: A psycholinguistic inquiry into the critical period for human speech*. New York: Newbury House Publishers, A division of Harper & Row, Publishers, Inc.
- Shing, Y. L., Werkle-Bergner, M., Li, S-C., & Lindenberger, U. (2008). Associative and strategic components of episodic memory: A life-span dissociation. *Journal of Experimental Psychology: General*, 137(3). 495-513.
- Sorace, A., & Robertson, D. (2001). Measuring development and ultimate attainment in non-native grammars. In C. Elder, A. Brown, E. Grove, K. Hill, N. Iwashita, T. Lumley, et al. (Eds.), *Experimenting with uncertainty: Essays in honour of Alan Davies* (pp. 264-274). New York: Cambridge University Press.
- Sorace, A. (2004). Native language attrition and developmental instability at the syntax-discourse interface: data, interpretations and methods. *Bilingualism*:

*Language and Cognition*, 7, 143–145.

- Sorace, A., & Filiaci, F. (2006). Anaphora resolution in near-native speakers of Italian. *Second Language Research*, 22, 339–368.
- Starks, D., & Bayard, D. (2002). Individual variation in the acquisition of postvocalic /r/: Day care and sibling order as potential variables. *American Speech*, 77:184–94.
- Tagliamonte, S. & Molfenter, S. (2007). How'd you get that accent?: Acquiring a second dialect of the same language. *Language in Society*, 36, 649–675.
- Tsimpli, I-M., & Dimitrakopoulou, M. (2007). The interpretability hypothesis: evidence from wh-interrogatives in second language acquisition. *Second Language Research*, 23 (2), 215–242.
- Trudgill, P. J. (1986). *Dialects in contact*. Oxford: Blackwell.
- Ullman, M. (2001). The neural basis of lexicon and grammar in first and second language: the declarative/procedural model. Bilingualism. *Language and Cognition*, 4 (2), 105–122.
- Uylings, H. B. M. (2006). Development of the human cortex and the concept of “critical” or “sensitive” periods. *Language Learning*, 56 (Suppl 1), 59–90.
- Walters, J. (1981). Variation in the requesting behavior of bilingual children. *International journal of sociology of language*, 27, 77-92.

## 参考資料 1

### 日本語版

下のそれぞれの状況で、なんといいますか。空白を完成させましょう。

#### 1. 友人を食事に招待するとき

あなた：『母が、君を食事に招待したいっていうんだけど、金曜日、うちで食事しない？』

友人：『ありがとう。よろこんで。お母さんにおあいするのがたのしみです。』

あなた：『

』

#### 2. とっさの判断 (省略)

#### 3. 誤解が生じたとき (省略)

### 英語版

**What would you say in each situation below?**

#### 1. Invitation

You : Would you like to come to our place for dinner on Friday? My mother would love to meet you.

Your friend : Sure, I'd love to. I'm looking forward to meeting your mother.

You : ([My mother is] \_\_\_\_\_)

#### 2. Making a quick decision (omitted)

#### 3. Misunderstandings at the hotel (apologizing) (omitted)

参考資料 2

日本語版

基本的な背景情報

名前(任意)

---

e-メール (任意)

---

出身地 (いつまで住んでいましたか)

---

現在、どこに住んでいますか。また、いつからそこに住んでいますか。

---

英語学習歴と学習機関

---

英語のレベル(自己評価)

---

英語版

**Demographic Data**

Name(option)

---

e-mail (option)

---

Where are you from?

---

University and major?

---

How long have you been in Japan?

---

Have you studied Japanese? If yes, how, where, and how many years did you study Japanese? Are you taking any Japanese course right now?

---

Self-evaluated your Japanese proficiency level

Speaking? Listening? Reading? & Writing?

---



### 参考資料 3

#### 日本語版

#### 同意書

私は、現在、『第一言語・第二言語(外国語)の社会語用論的言語能力の習得における臨界期』という課題で研究をしております。具体的には、実社会における言葉の使い方(語用論)と状況にあった適切な言語使用の習得、年齢が語用論的能力習得に与える影響に関する研究です。そこで、このアンケートを通して異なる状況においての様々な言葉の使い方を考え、年齢が語用論習得に与える影響を考えてみることになりました。皆さんからいただいた貴重なご意見・ご回答は、このプロジェクトのために匿名にて使わせていただきたいと思います。以上のような趣旨にご賛同いただけたら以下に署名をいただければ幸いです。ご協力ありがとうございます。

「私、\_\_\_\_\_は、貴プロジェクトのために私の回答・意見を  
使うことを許可します」

日付 \_\_\_\_\_

署名 \_\_\_\_\_

#### 英語版

#### Consent Form

I am currently conducting a study on “pragmatics (the use of language in a real world) and the critical period (in terms of the effect of age in the process of language acquisition)” to make some contribution to the field of Applied Linguistics and Intercultural Communication. Theories created on the basis of your responses will also be used to develop better teaching/learning materials in Foreign Language Education and Cross-cultural Communication. I would appreciate it if you could contribute your observations and experiences to my study.

#### Please choose either Yes or No

“I will contribute my responses to your study and give you my permission to use them when you write a paper on this topic.”

YES / No

Date \_\_\_\_\_

Signature \_\_\_\_\_